

「魚沼つなんコシヒカリ」栽培ごよみ

品種特性			
熟期	中生	品質	上の中
出穂期	8月上	玄米の粒大	中
草型	中間型	食味	上の中
苗丈	やや長	高温耐性	やや弱
稈長	長	発芽性は難であるので、適正な水温で浸種日数を十分にとる。 長稈で倒伏しやすいので、良質茎を早期確保し生育調節を徹底して、過繁茂や倒伏防止に留意する。 出穂期が早まり、登熟中期が高温に遭遇すると品質が低下するので、は長期・移植期は早めない。	その他
穂数	中		
一穂粒数	やや多		
ふ先色	黄白		
耐倒伏性	弱		
耐いもち	強(真性抵抗性をもつ)		
耐いもち	強(真性抵抗性をもつ)		
耐病性	紋枯病 やや強		

目標収量と構成要素	
収量	510kg/10a
1穂粒数	73粒/本
穂数	360本/m ²
m ² 当たり粒数	26,000粒
玄米千粒重	22.0g
登熟歩合	90%

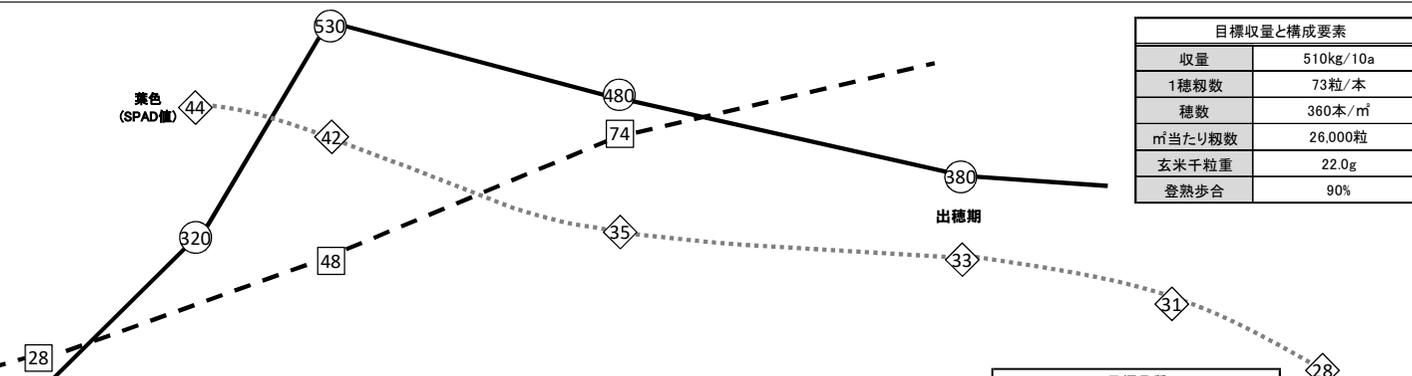
92 稈長(cm)
92 成熟期
360 穂数(本/m²)

健苗育成(中苗)

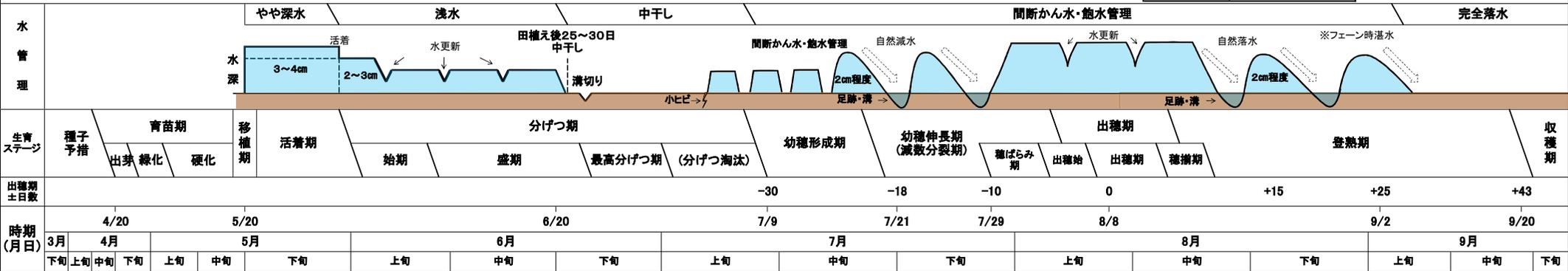
苗 文: 1.5cm
葉 齢: 3, 5葉
第一葉鞘長: 3cm
育苗期間: 3.0~3.5日

播種 中苗 4/20~25
田植 5/20~25

草丈(cm) 15
茎数(本/m²) 70
60株/坪植え (18.2株/m²)



目標品質	
整粒歩合	80%以上
玄米水分	15.0%
1等米比率	100%
玄米タンパク含有率	5.5~6.0%
食味評価値	80以上(特選製機TM-3500)



時期(月日)	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月									
時期別管理	塩水選・浸種	育苗・土準備	土全層・基肥・資材散布	耕起・代かき	葉いもち・除草剤散布	田植後・葉いもち・除草剤散布	除草剤散布	葉いもち防除(本田田用)	中溝干し	中間追肥	1回目穂肥	2回目穂肥	カメムシ防除	落水	収穫・乾燥	稲わらすき込み
時期別管理																

注 意 事 項	初期生育の促進と良質茎の確保				適正な水管理と生育診断による適期・適量穂肥で後期栄養を確保				適期収穫で良食味・高品質米				
	育苗・本田準備	田植え	水管理・水田除草	中干し・雑草防除	調整肥施用・水管理	生育診断・穂肥施用	カメムシ防除	水管理・落水	収穫・乾燥・調整・土づくり	調整肥施用・水管理	生育診断・穂肥施用	カメムシ防除	水管理・落水
	・浸種は適正な水温・水量を確保し、積算温度100℃をめやすとする ・適正な播種量・育苗日数で健苗育成に努める ・耕深15cmを目標に耕うし、十分な作土を確保する ・土壌分析に基づいた土壌改良剤を施用し、効果的な土づくりに努める	・ほ場条件に見合った基肥量に留意し、倒伏しやすいほ場では施用量を控える ・栽培密度は平坦地・台地では50~60株/坪をめやすとし、稈端の疎植は避ける ・良質茎を確保するための、1株当たりの植付本数は3~4本とする ・葉いもち防除1回を基本とし、使用方法・時期に留意する	・田植え後〜活着までは水深3~4cmの保温的管理とし、活着を促進する ・活着後はやや浅水とし、分けつの発生を促進する ・水田除草剤の使用にあたっては、使用方法・時期の遵守や剤型に見合った水深を確保し、薬剤効果を高める ・ワキの発生が多い場合は夜間落水し、根腐れに注意する	・田植え後25日~30日をめやすに、茎数290本/m ² 程度を確保したら中干しを開始する ※50株/坪植え→20本/株 ※60株/坪植え→17本/株 ・用水を有効利用するため、8~10条おきに溝を切る ・カメムシの耕種防除として、水田内の雑草や畦畔農道の除草を行う	・中間追肥(調整肥)を活用して、稲体活力を維持する ※施用時は湛水し、肥効を高める ・中干しは田面に小ヒビが入る程度とし、出穂の30日前までに終了する ※強すぎる中干しは根を傷め、稲体活力が低下するので注意する	・ほ場条件と生育診断により適正穂肥の施用に留意する ・穂肥は2回に分けて施用する ・施用時は湛水し、肥効を高める ①幼穂長を確認し、正確な出穂時期を予想する ②草丈・葉色を測り、施用量を定める ③診断結果、ほ場条件、気象予報など総合的に判断する (2回目穂肥/出穂期10日前) ※後期栄養を確保するため確実に施用する ・稲こじ病は薬剤(剤型)の使用法を確認し、適期防除に留意する	・出穂直前の畦畔農道の草刈りは、カメムシを水田内に追い込む恐れがあるので、出穂前の7月下旬までに行う ・カメムシ防除は薬剤(剤型)の使用法を確認し、適期防除に留意する ※適正防除(時期や水深など)ができないと薬剤効果が劣る可能性がある ・薬剤は全面防除を基本とし、斑点米被害の抑制に留意する	・出穂後25日間は飽水管理を行い、早期落水しない ・異常高温やフェーンが予想される場合は事前に速やかに湛水し、稲体の水分ストレスを軽減する ・黄化割合が85~90%になった頃をめやすに収穫する ・出穂後の積算温度は平温年では平坦地で1000℃、山間地・台地で1050℃をめやすに収穫する ※高温年は2日(50℃)程度早める ・適正な乾燥、調整を行い、人為的な品質低下を防止する ※胴割れ、肌ずれ、水分過多など ・稲わら秋すき込みを行い、浅うちで分解を促進する					